

子供の人格の尊重

私の初任校は、知的障害児童生徒のための養護学校(現・特別支援学校)でした。大学で障害児の指導について学んだとは言え、実体験は数週間の実習のみの私は、天真爛漫すぎる子供たちを前にして、対応に悩む日々でした。

しかし、ありがたいことに周囲には経験豊富なベテランの先生方が揃っておられ、私の不手際な対応を温かく見守り、また、そっと助けてくださいました。その中でも、H先生という、年齢は私の母親ぐらい離れていましたが、その先生から教師としての基本を教わったように思います。

H先生は、小学部低学年の自分のクラスの子供たちを、名前に「さん」を付けて呼んでおられました。知的に障害があると、どうしても年齢より小さい子供のように感じて、「○○ちゃん」と呼んだり、親しみを込めるあまり、呼び捨てにされる先生もおられる中で、「太郎さん」「花子さん」のように呼んでおられたのは、教科書のように、とても新鮮に響きました。いつも、ここにこしながら子供たちのことをしっかりと見て、して良いこと駄目なことを「……ですよ。」「……しますよ。」と、ていねいな言葉で教えておられ、まだ未熟とも思われる子供たちの人格をきちんと尊重しておられるのを感じました。

また、先生は、私のちょっとした指導のよいところを見つけて、「先生のそれいいわー。やっぱり若い人は思いつきが新しいね。」などと、褒めてくださいました。右往左往していた私は、その一言に元気づけられて、『また頑張ろう。』と思ったことを覚えています。そして、「先生、それ記録しとかれたらいいよ。」「私にもまた見せてね。参考にしたいから。」と、記録して振り返ることの大切さなどを、さりげなく助言してくださいました。担任している子供たちの人格を尊重すると同じように、新米教師の私の自尊心も大切にして、押しつけにならないように上手に指導して下さったのでした。

H先生は、初任者の指導や研修の係でもなく、同じ学部の先輩教師というだけの立場でしたが、一緒に仕事をしていく中で後輩を育てるのは、自分たちの当然の仕事だと思っておられたのかなと、今でも思い出す度にありがたく、感謝しています。